

女神神学とフェミニスト神学との対話は何を示すのか

ローズマリー・R. リューサー著『女神と聖なる女性性¹』をめぐって

小松 加代子

1. 問題の所在

女性の運動がフェミニズムとして形をとって展開していくのと同時に、宗教とフェミニズムの関係をめぐっての模索も続いてきた。特に欧米においては、ユダヤ・キリスト教とのかかわりをめぐって様々な議論がなされてきている。もとよりフェミニズムは宗教が女性差別を助長してきたことを批判してきたのだが、宗教を断罪するだけでなく、宗教内部からの改革を求める側面も持っている。

本論文では欧米、中でもイギリスとアメリカにおける女神信仰とフェミニスト神学を取り上げ、ユダヤ・キリスト教との境界において、女性と宗教のあり方を問う試みから何が見えてくるかを考えてみたい。

宗教を考えるフェミニストの中でも既成宗教に対する態度は大きく2つに分かれる。既成宗教の信者としてとどまり、その内部でフェミニズムの視点から改革をしようという人びとと、既成宗教では改革は不可能と考えて、既成宗教の枠外で宗教活動をする人びとである。この両者は、同じ目的を持って始まりながら、キリスト教に留まるかどうかどうかをめぐって分裂し、それ以降、議論のやり取りが続けられてきた。キリスト教の中でフェミニスト神学を押し進めてきた一人である、ローズマリー・R・リューサーは、近著『女神と聖なる女性性 (*Goddesses and the Divine Feminine*)』において、女神信仰を進める人々とキリスト教フェミニストの両者に対し、様々な宗教に出現してきた極端に攻撃的な父権制²のファンダメンタリズムに対抗するという共通の信念に立っていることを認識しようと呼びかけている。

リューサーは 1980 年代から女神信仰に対して批判を向けてきた。そのリューサーが女神信仰への歩み寄りを示したのはなぜかを検討してみたい。

広まり、ワークショップの開催もこれ以降さまざまな場所で行われるようになっていった。それまで宗教的であることはキリスト教徒であることと同等と考えられていた社会の中で、宗教的なものを求めて教会と衝突して悩む女性たちも多かった。そうした女性たちにとって、「スピリチュアリティ」という新しい言葉は、自分自身の宗教性を表現する象徴的言葉となった。教会に属さなくとも宗教的であり得ることを、この言葉は表現してくれたのである。そして、その宗教的であるものの表現として、魔女、キリスト教以前の自然崇拜儀式や暦なども多くの女性たちに知られるようになっていった。

1979年には、こうした動きを象徴するような書物の出版が相次いだ。まず、メアリ・デイリーの『ガイン/エコロジー (Gyn/Ecology)』である。デイリーは、1973年の『父なる神を越えて』以後、キリスト教は本質的に父権制的であるとして、聖書と教会の男性中心主義と訣別することを宣言する。この『ガイン/エコロジー』において、デイリーは自分自身がもはやキリスト教徒ではなく、ポストキリスト教徒であるとし、キリスト教とは別の女性中心の宗教・哲学の追求へと向かうと公言している。デイリーは、神 (Deity) はあまりにもダイナミックで常に変化しているため名詞で語るには適さないと考え、「在る—もの (Be—ing)」「女神であること (Goddessing)」という動詞で語ったり、女性を蔑視する「意地悪な醜い老女 (Hag)」や「オールドミス (Spinster)」といった言葉の意味を解釈し直したり、用語を新しく創り出すことなどを提案した。デイリーは著書の中で自らを積極的な改革老賢女 (positively revolting hag) と呼んでいる⁵。

このように教会を断罪し、教会から去ることを宣言し、新しい言葉や神学を創ろうと試みるデイリーの行為は、教会に疑問を持っていた女性たちに勇気を与えた。中でも、キリスト教と異なる女神信仰や魔女術に共感を覚える女性グループは、少人数のグループを構成し、それぞれ独自の儀礼を作り出していった。

同じく1979年に出版された『神々の交代 (Changing of the Gods)』の中でナオミ・ゴールデンバーグは、フェミニズムは伝統的な宗教すべての終焉を描き出し、宗教の未来は、女神信仰にかかっていると述べた。また、キャロル・クライストは、プラスコウとともに『ウーマンスピリット・ライジング (Womanspirit Rising)』を編集し、「宗教が女性を劣った存在であると教えていたという発見は、精神的・宗教的な深い経験に対する裏切りであると女性たちは感じている。・・・女性の人間としての尊厳を十分にサポートするように宗教を改革、あるいは創り直すべきだと女性たちは確信した⁶」と書いている。

この年、古くからの知恵の集大成である魔女術の紹介として、スターホークの『聖魔女術 (*The Spiral Dance*)』や、マーゴット・アドラーの『月神降臨 (*Drawing Down the Moon*)』も出版されている。ゴールデンバーグ、クライスト、スターホークなどのように、聖書的伝統の外に女性中心のパラダイムを作ろうとする女性たちの中から、キリスト教からの断罪を否定し、過去の女神信仰と女神の復活を求めて、古い象徴を使いながらそれに新しい意味を付与し、あらたな宗教的儀式をも創造しようとする積極的な運動が登場することになった⁷。

4. 女神神学

キリスト教から離れ、独自の活動を行う女性たちの宗教活動の中で、際立って特徴的なのが女神信仰である⁸。それまでのユダヤ・キリスト教の神学 (theology) に対して、神学の「theo (神)」を「thea (女神)」に置き換え、フェミニズム的意味づけを付加したものを「女神神学 (thealogy)」と呼ぶ。女神神学は、西洋の一神教の神を再構成しようとするフェミニスト神学からの分離という形で始まったということができる。ラファエルによれば、「それは、女神信仰の女性たちの経験と、より幅広い解放の歴史から引き出された思考体系である。聖なるものの女性性と、女性性の聖性についてのフェミニスト的思考、より一般的には、その両者の意味についての精神的、倫理的、政治的な思考」を集大成したものといえよう⁹。

女神神学は正統な聖典などというものを持たず、教義も信条も確立されていない。それぞれの女神信仰者がそれぞれの女神についての概念を持っている。その特徴的な例は、スターホークの次の言葉である。

すべて私がどう感じるかによるのだ。私が落ち込んでいる時には、女神は私を助け守ってくれる。私が元気な時には、女神は私自身の力の象徴となる。それ以外の時には、私の体や世界の中の自然エネルギーとして女神を感じる¹⁰。

女神神学は、個人主義的で、プラグマティックである。そして同時に一神論でなかったり、一神論だったり、多神論であつたりもする。とらえどころのない女神神学ではあるが、共通する特徴をあげるとすれば、次の3つであるとラファエ

ルは述べている。まず、第1に女神は自然であるということ。第2に、女神は少なくとも、「女性の力」の集合的あるいは個人の象徴であること。第3に、女神は単なる信仰の対象ではなく、存在そのものが女神であり、個の存在と分離することはできないこと。自然が女神であるならば、自然の乱開発は当然ながらエコロジーの問題であると同時に、女神信仰者にとっては宗教的な問題となる。したがって女神信仰は初めからエコ・フェミニズムなのである。そしてこの現代社会のあり方そのものが、父権制社会の結果であり、女神の復活は、現代社会の改革を要求する政治的な目的ともなり得るのである。

女神神学に影響を与えた要因について、ラファエルは、次の3つをあげている。ひとつは、啓蒙主義時代に始まる教会の専制への批判、2つ目は19世紀のロマンチズムで、当時起こってきた工業化・産業化を自然との不調和とみなし、ペイガニズム¹¹の伝統を再構築しようとする動き、3つめは1960年代70年代のカウンターカルチャーであるという。ラファエルは、キリスト教の中でも、アニー・ベサントやフランシス・スウィニーをこの女神神学の先駆者とみなしている。教会や聖書の権威を拒否するというラディカルさでは、エリザベス・ケイディ・スタントン、マチルダ・ジョスリン・ゲイジにも直接結びついている。

同じように、イギリスで女神運動を始めたひとりであるアスフォデル・ロングは、女神信仰の展開への素地は、次の3つであったという。ひとつは、フェミニスト運動であり、2つ目はニューエイジ思想と結びついた新ペイガニズム、3つめは基礎となる材料としてのユダヤ・キリスト教である¹²。

ロングは、女神信仰に人々の関心が深まっていったのには、特にペイガニズムの影響が大きかったという。ペイガニズムの中心には聖なる女性という概念があり、これに比べると既成宗教では、女性是不完全で、全体性に欠け、不浄であるというイメージが伴っている。またペイガニズムではセックスへの恥や罪の意識も払拭されている。ペイガニズムには多様な形態があるものの、一般にそれは自らの神聖性を取り戻し、自分の中の女神を認識し、性の否定を消し去るという点で、女性にとって非常に魅力的なものとなった。そしてフェミニスト運動の中で作られたコンシャスネス・レイジングの手法と合体して、それぞれの人が、その時に思いついた儀式で、名もない女神を讃え始め、自分のアイデンティティや希望を肯定するという新たな運動がもたらされた。その中でも、コンシャスネス・レイジングなどによってもたらされる自分の変容こそが魔術だという考え方が受け入れられていくことになる。

ラファエルやロングが共通して指摘しているように、女神信仰はキリスト教社会だけではなく、それ以外の運動や思想、たとえばペイガニズムやニューエイジとカウンターカルチャーの影響を受けて発展してきたということができよう

13。

5. リューサーの批判

こうした女神信仰に対し、フェミニズム神学の側から批判が加えられている。フェミニスト神学を進めてきたリューサーは、フェミニスト神学とは、聖書の伝統の中に、女であれ男であれ誰をも排除しない新しい関係性のあるパラダイムを作ろうとするものであるとし、女性ばかりを強調する女神信仰に疑問を投げかける。多様なフェミニスト神学ではあるが、キリスト教における男性中心主義を批判し、それを克服しようとする点では女神信仰とも共通している。しかし、女神信仰は女性だけを対象とした女性中心の社会を作ろうとする偏った考え方であるため、聖書が間違っただけで読まれることが多く、また後から作られた神話に依存した根拠のないものであると批判する。以下リューサーのいくつかの論文から、その批判内容をより具体的に検討してみたい。

1983年の『性差別と神の語りかけ (*Sexism and God-Talk*)』では、女神信仰について、「男性による階級主義を逆転し、女性を人間の規範とし、男性を人間という種の中で『欠陥の多い』ものとしている。男性をこうして敵とすることで、競合関係、エゴ権力志向といった人間の能力を男性の中に投影している¹⁴」と批判している。

1986年の論文「女神と魔女 (*Goddess and Witches*)」では、リューサーはフェミニストの女神を中心にした宗教は、間違っただけで解釈に基づいて歴史を作り上げていると批判し、そうした運動は根拠を欠く怪しいものだと言っている。リューサーの認める歴史的事実とは、以下の文章に見られる。

古代中近東の女神たちがパワフルで独立していたことは確かであるが、これが実際の社会での女性の立場を映し出していたわけではない。そうした女神を中心に女性たちがグループを作っていたという事実も見当たらない。バビロニアのイシュタルを祭っていたのは支配者階級である。・・・女神が登場する宗教は、中東の男性の王の地位を確立し維持することを基本的に目的と

していた¹⁵。

また、偏った知識から引き出される極端な例として、フェミニストたちの魔女狩り批判をあげ、魔女と女神信仰とを結びつけることはできないと主張する。

中世の魔女の資料を見ても、魔女とみなされた人たちが女神を祀っていたという記録はない。また、魔女を摘発した人たちによれば、魔女が祭っていたとする「悪魔」は男性である。また、当時の魔女たちがカヴン (coven) のような集団形式をとっていたという証拠もない¹⁶。

さらには、魔女狩りにあつたとされる女性の数が異常に多く記述されている点、また魔女狩りで殺された人数の4分の1は男性だったことに触れていない点で偏った論調であるとしている。

1992年の『ガイアと神 (Gaia and God)』においてもその論調は変わらず、失われた楽園という理論は、もともとは母系制だったという考え、すなわち父権制社会の前には、女性が男性を支配していた時代があつたということを意味するものだ、と記している。ここでリューサーは、父権制以前の社会の存在を示す証拠があいまいであることを強調し、さらに、父権制以前に今よりも平等で、女性を象徴とするような古ヨーロッパ文化があつたことは疑わしいとする。リューサーは、女神信仰の女性たちが強調する、父権制以前の社会が母系制だった、あるいは女性が中心の社会であつたという考え方は、現代社会への批判として現実に存在していない理想郷を想定したにすぎず、根拠がないばかりか、むしろ現在の父権制を逆にした女性の権力を強調した社会にすぎない、と訴えるのである。

リューサーは、こうした母権制社会あるいは古代の女神信仰に固執する人々とは異なって、過去の問題ある歴史を批判することによって確立してきたのが、フェミニスト改革派のキリスト教徒であると主張する。根拠のない歴史以前を創造するのではなく、自己の宗教的知識の起源と歴史に対する自己批判という規範を確立したことがフェミニスト神学の基盤であるというのである。

リューサーは、メアリ・デイリーに代表される考え方を、「男性性と女性性を生得的なもの、本質的なものと考えがちである」と批判する。すなわち、男性=悪とすることで、女性の中には悪が存在しないことになり、かえって女性の自己認知が妨げられるために、女性どうしの間においてさえも連帯を作り上げることは

困難になるだろうと指摘する。

リューサーの女神信仰への基本的な批判は、2005年に出版された『女神と聖なる女性性』でも変わっていない。ここでリューサーは、当初発掘された女神像が古代の女神崇拜社会を指し示すものと考えていたと述べ、その考えを見直すきっかけとなったのは、教えていた学生たちの反応だったという。フェミニストでもあった学生たちは、古代の女神像を見て、それらが女性の生殖機能を特化して作られたもので、女性の生き方への肯定につながるとは思えないと口々に言ったという¹⁷。リューサーは、学生たちの感想から、古代の女神像がフェミニストにとっての理想ではなく、むしろ男性中心社会が作り上げたものではないかと思いついたと書いている。リューサーはそれ以降、女神崇拜社会、あるいは古代の女性中心社会という考え方に対して、常に疑問を持って研究してきたという。

歴史以前に女性中心の社会があったとは考えにくい、さらに、ある日突然社会が変わることはなく、それ以前にあったものがだんだん形を変えていくのであるから、歴史的な一時期に、女性中心の社会が、男性中心の社会に取って変わられたとは考えられない。こうした論点は継続的に受け継がれている。具体的な例として、イナンナ、イシュタル、アナト、イシス、ディメテルのような、メソポタミア、パレスチナ、エジプトとギリシャで見つかった女神たちをあげながら、それらはあくまでも支配階級が都市において作り出したものだという主張が続く。

さらにユダヤ教に伝わる知恵や、キリスト教のマリアなど、女性として語られるものが存在し続けているものの、それらも男性から与えられた女性らしさというイメージから脱し得ないという。そもそも父権制社会が女神、あるいは女性的なるものをすべて拒絶してきたわけではない。ユダヤ・キリスト教世界の中でも、聖なる女性性は常に生み出されてきた。しかし、その際に、そうしたものが現代社会のフェミニスト的な視点をもって作られたものではなく、むしろ男性中心社会の中で女性に期待されるものが象徴的に表されたにすぎない、とリューサーは考える。この本のタイトルを「女神」だけにせず、「聖なる女性性」という言葉を加えたのは、男性中心主義の考え方から作られた女性のイメージは、フェミニストの目的には使えないことを明確にする意図だった¹⁸と、リューサーは述べている。フェミニストにとっての理想的な女性像が過去にそのままの形で存在していたとは考えられないがゆえに、男性中心主義の思想を帯びた女性性 (feminine) という象徴を無批判に使うことは、フェミニストの方向性を見失うことになるのではないかと危惧しているのである。

リユースのこうした批判は、女神信仰の人々にとって、どのような意味を持つものになるだろうか。次に女神信仰の人々が母権制社会、あるいは歴史的な事実にどのように向かい合っているのかを見てみたい。

6. 女神信仰と母権制社会

母権制社会、あるいは女性中心の社会が、父権制社会の前にあったという考え方は、父権制的な既成宗教の伝統を拒否した女性たちに熱狂的に迎えられた。人間社会が生来父権制を作り上げるものでないならば、将来、今の社会とはまったく別の社会ができあがる可能性があることになる。そして、女性中心の、前父権制的な古代の諸宗教へと回帰するという考え方は、1970年代には女神信仰の女性たちに広がり、信念として語られるようになった。このとき、特にギンブタスの著作は女性たちに大きな影響を与え、女神信仰を始めた女性に勇気をもたらし、新たに参加する女性の数も増加した。このように運動の初期において、「母権制社会」という概念は大いに意味があった。そしてそこには、魔術や異教信仰、女神崇拜などが含まれていた。

たとえば、スターホークは1974年に出されたギンブタスの著作の影響について、次のように述べている。

女性中心の（matrifocal）文明の再発見は、女性にも文明を創造し維持する能力があるのだという誇りを私たちに与えたのです。これは父系社会的歴史観の欺瞞を暴き、女性の権力と権威の手本を示すものでした。今日の世界において、古代及び原始の女神が再認識されたのです。－女神は人間にとっての最初の神、石器時代の狩猟と初期農耕の守護神であったこと、女神の指導の下に家畜を飼育し薬草を見つけたこと、女神の像が最初に造られた芸術作品であったこと、女神を祀って巨石が設置されたこと、女神により歌や詩のインスピレーションが与えられたこと……。女神は社会的制約によって生まれた私たちの内奥の亀裂に架かる橋であり、私たちはそれを渡って失われた潜在能力を思い出すのです¹⁹。

しかし、女神信仰の女性たちが父権制社会の前には母系制あるいは母権制社会

があったということを、事実として主張することに固執していた時期は、それほど長く続かなかった。ギンブタスの著作が考古学者たちに取り上げられることが少ないこと、母権制社会の存在の証明が簡単にできるわけでないということがすぐに分かってきたからである。

にもかかわらず、女神信仰が衰えなかったのは、ギンブタスの著作がもたらした精神的な変化が重要だったからであろう。スターホークは、2001年の論文で、彼女の考える女神信仰は考古学に基づいているわけではないと主張している。

私たちのスピリチュアリティは、信念に基づいているのではなく、経験に基づいている。・・・考古学者は、ギンブタスの理論を証明することも反証明することもできないだろう。しかし、彼女が発見した古代の像は貴重である。なぜならば、それらは深い連関を感じさせる。女神像は、私にとって、私の想像性を目覚めさせてくれるという点で、女神として生きている²⁰。

ギンブタスの著作以降、母権制社会あるいは女神の存在が大いなる意味を持つことになったのだが、それは考古学的な業績としてではなく、むしろ発想の転換、あるいは別の意味の発掘として女性たちの心に響いたというのである。そして、リューサーらの批判に答えて、「母権制」という言葉は80年代初期以降使っておらず、そうした批判は現状を見ずになされたものであると応えている。実際に女神信仰に関わる女性たちの著作を見てみれば、父権制以前の母権制社会の存在の主張は歴史的な証明が可能なものとして語られたというよりは、むしろ、父権制社会が歴史的に必然的であったとは限らないという考え方が、女性中心で平和な社会を希求してもよいとする考え方と結びついて、物語・神話風に描かれていることがみてとれる。

少し戻って、1994年のロングの文章を見てみよう。

女神の定義さえ、女神信仰の女性たちは気にしていない。とりわけ、定義がキリスト教的・一神教的定義を意味しているときには、定義をすること自体が意味をなさない。「むしろ、女性の生活に一致する観念のかたまりを前面に持ち出し、何か「それ以上の」もの、何か「聖なる」ものに価値を見出す。それが「女神 The Goddess」と理解されている」²¹

1975年から「母権制グループ (Matriarchy Groups)」と称するグループを作って活動してきたロングは、次第に外に存在する女神に加えて、内に存在する女神が重要であると感じるようになっていったというのである。「女神を高めることによって、自分自身を高め、自分自身を高めることによって女神を高める」という思いは、女神を崇拜する社会、女性中心の社会が、歴史的に証明されなくてもよい、ということの意味すると同時に、それが神話としての存在以上に、女性たちに何らかの力をもたらす、行動を起こさせる源として存在しているということの意味している。創造された神話が女性たちの経験を引き起こし、その経験がさらに神話への信念を強くする循環になっているのである。

7. リューサーの歩み寄り

リューサーは、女神信仰の根拠のなさや、母権制社会の歴史的事実の欠如などを批判してきたのだが、その著作『女神と聖なる女性性』では、その姿勢に変化も見せている。リューサーは序章において、この著書は女神信仰などキリスト教とは別の伝統を求める人々との歩み寄りを目的としていると述べ、最終章では、リベラルで進歩的なキリスト教徒はウィッカン（魔術信仰者）やペイガンの宗教的自由を擁護する義務があるとさえ主張しているのである。

その義務とは次の2点である。たとえ魔術信仰や女性中心の元始の社会の存在について意見を異にしようとも、魔術信仰はキリスト教徒が同様に尊重すべき生命の価値を肯定する運動であることを認めること。そして、魔女狩りは女神信仰の人々を標的にしたものではなかったものの、無実で、多くは貧しく、無力な女性、男性、子どもたちに対する犯罪であった。キリスト教徒は今こそ公に犯罪であったことを認め謝罪すべきであり、魔女狩りで標的になった人々は悪魔教の信者ではなく、無害な人々であったことを明確にすべきである。この2点を認めた上で、生命を肯定し、自然と調和し平和を促進しようとする宗教運動に対して、心を開く必要があると説いている²²。

そしてリューサーは、宗教に関心のあるフェミニストの戦略として次の3つをあげ、どの道も正当であるとしている。1つは、ユダヤ教、キリスト教の預言者的、解放のテーマを呼び起こし、現代の共同体の中でフェミニズムと共感しあえる再解釈を求めるもの。2つ目は、仏教やヒンドゥ教のように、男性神がいない、あるいは神がいない、あるいは女神がいっぱいいるというような宗教を求めるこ

とで、それらはフェミニスト・スピリチュアリティの主張になりうると考える。
3つ目は、既成の宗教体系はすべて父権制の時代に作られたとして、その再解釈をあきらめ、父権制の登場する前の時代にモデルを求め、自己と社会の新しい革新的な変革を求めて、元始に戻ろうとするものであるという²³。リューサーは第1の道に属し、第3の道に女神信仰が入ることになる。

実はリューサー自身のこれまでの主張には、女神信仰の人々とそれほどかけはなれていないところもある。特に、エコロジーの観点と神学をつなぐという考えはフェミニスト神学と女神神学を信ずる人たちが共通に認識している領域である。リューサーも「ウィックカンとエコ・フェミニストには共通点がある²⁴」と述べているが、エコ・フェミニズムとして書かれたリューサーの論文は、女神信仰の人々の論調と重なり合っているところが多い。

女性たちは、関係の基本的なモデルが支配であり続ける社会では、解放も生態学的危機の解決策も存在しないことに気づかなければなりません。女性たちは、女性解放運動の要求とエコロジー運動の要求とを結合し、基本的な社会経済関係と、現代の産業化社会の基本的な価値をラディカルに再構築しなければなりません²⁵。

現代社会が、軍事力、経済的搾取、エコロジーの危機に脅かされているという認識を持ち、その解決のために行動に移すという動きは、両者に共通している。さらに、この危機の原因のひとつとして、神という男性的なヒエラルキー概念が社会の支配パターンを補強している点をあげ、既成宗教の父権制システムを批判する点でも同じである。

エコ・フェミニスト神学に共通する特徴は、神 (the divine) と地球との分離という思想を拒否していること、および、生命を与えるエネルギー、あるいは生命を維持し、再生する存在を神 (the divine) として認めることである。この点において、インドのエコ・フェミニストであり活動家であるヴァンダナ・シヴァ (Vandana Shiva)、ブラジルの神学者であり哲学者であるイヴオンヌ・ゲバラ (Ivone Gebara)、ウィックカンでありペイガンのネットワークを作り活動しているセレナ・フォックス (Selena Fox)、魔女であり活動家であるスターホークらの主張に隔たりは見られないと、リューサーも述べている。さらに、最近のイラク戦争批判、イスラエル・パレスチナの問題との関わり、世界資本の寡占化への

反対運動などをみれば、それらの活動の中身は驚くほど似ているというべきだろう。

8. 最後に

あらためてここで疑問が生じてくる。リューサーはそもそもなぜ『女神と聖なる女性性』を著したのだろうか。考古学的資料や神話からうかがえる女神像を検証し、それらが現在に続く父権制社会の登場以前に、女性中心で平和な社会があったことを証明するわけではないということ、そしてユダヤ・キリスト教の伝統の中に時々現れる知恵や、女性として語られる聖なるものの存在が、過去に実在した異質な文化における信仰を暗示しているわけではないということを今さらながらに描き出さなければならなかったのは、いったいなぜだったのだろうか。

リューサーの意図が女神信仰への批判であつたとすれば、すでに論じてきたように女神信仰の女性たちはもはやそれを問題としておらず、いわばの外れに終わっている。だとすれば、この著作においてリューサーが語ろうとしたことは何なのか。

フェミニズムやエコロジーに対するバックラッシュが勢力を持ちつつあるように見える現代社会の中で、リューサーはそれに対抗してリベラルな宗教活動者同志が連携をしようと呼びかけているのだが、それはつまり、間違ったナショナリズムと宗教的ファンダメンタリズム批判をするにあたって、キリスト教内部よりむしろ、外部に共感者を見出していることを示しているのではないだろうか。

エコ・フェミニスト神学の構想において、リューサーの視点は、女神信仰の人々と重なり合っている点が多い。しかし、女神信仰者はかなり自由にさまざまな文脈から女神像や言葉を持ち出してきて適用している。その基準は個人の経験に任されている。また、現代社会批判においては、父権制社会とは異なる理想の社会像を、例えば神話という形で掲げることができる。一方、エコ・フェミニストとして言葉を発する人々、リューサーがあげているヴァンダナ・シヴァやイヴォンヌ・ゲバラなどは、欧米以外の文化の影響と自分の生きる地域の生活経験からもたらされる知恵を持ち込んでいる。第7章では、キリスト教に取り込まれながらも、男性が作り上げた女神を、女性たちが自分たちのために解釈し崇拝するメキシコの「グアダルーペのマリア」あるいは「アメリカの女神」の例を取り上げたが、これも欧米のキリスト教文化の枠にはとらわれない生命力の表れである。それに

対して、欧米の伝統的な神学の中からはフェミニズムやエコロジーを説くのに適した言葉や象徴は、なかなか見つけにくく、そこで新たな神話を作り出すこともできない。

リューサーはこの著作において、男性に作られた女神神話を解体しようと試みた結果、歴史的な解釈批判に終わってしまったように見える。その代わりとなる神話を提供しているともいえず、従来の欧米の神学・哲学に基づいたフェミニスト神学の限界にリューサー自身が行き当たってしまったということを、この『女神と聖なる女性性』は示しているようである。とすれば、むしろ今後リューサーがフェミニスト神学を、欧米の神学・哲学を越えてどのように創り上げていくのか、問われていくだろう。

*本研究は、文部科学省の科学研究費（17510219）の助成を得たものである。

¹ Rosemary Radford Ruether, *Goddesses And the Divine Feminine: A Western Religious History*, Univ. of California Pr, (2006/11/20)

² patriarchy の訳である。「家父長制」と訳されることも多いが、本論文では、matriarchy を「母権制」matrifocal を「母系制」あるいは「女性中心」と訳したので、合わせて「父権制」で統一した。

³ Elisabeth Schussler Fiorenza, in *Transforming the Faiths of Our Fathers*, ed. by Ann Braude, NY: PALGRAVE MACMILLAN PRESS, p.138.

⁴ Melissa Raphael, *Introducing Theology: Discourse on the Goddess*, Sheffield Academic Press, 1999, p.36.

⁵ Mary Daly, *Gyn/Ecology*, Women's Press Ltd, 1979.

⁶ Carol P. Christ & Judith Plaskow, *Womanspirit Rising: a feminist reader in religion*, HarperCollins Publishers, 1979, p.1.

⁷ スターホーク『聖魔女術』国書刊行会、1994年。マーガレット・アドラー『月神降臨』国書刊行会、2003年。

⁸ 女神信仰者がすべてフェミニストというわけではない。ラファエルは女神信仰者でフェミニストを Goddess feminists と呼んで、区別している。

⁹ Raphael op.cit, p.10

¹⁰ Christ & Plaskow, *Womanspirit Rising*, pp. 278-279.

¹¹ paganism は異教主義などと訳されることもあるが、ユダヤ・キリスト教から見た否定的な意味を示すことが多い。本論文では、マーガレット・アドラーと同様に、ユダヤ・キリスト教に対するものと等しく、宗教的な実践をしている人たちをペイガンと呼ぶことにした。ペイガニズムとニューペイガニズムを区別することもあるが、ここでは、ユダヤ・キリスト教以前の宗教に基づくと考えられている自然宗教（nature religions）を指すものとする。アドラー、前掲書。

¹² Asphodel Long, 'The Goddess Movement in Britain Today,' *Feminist*

Theology 5, January 1994.

¹³ 同じことはニュージーランドでも起きている。Kathryn Rountree, 'The Lion, the Witch and the Celebration of Discursive Diversity,' *Feminist Theology*, 13.2 (2005) 159-16.

¹⁴ R=R. リューサー『性差別と神の語りかけ』新教出版社、1996年、p.302。

¹⁵ Rosemary Radford Ruether, 'Goddess and Witches: Liberation and Countercultural Feminism,' *The Christian Century*, September 10-17, 1980, pp. 842-847.

¹⁶ Ibid.

¹⁷ Ibid. p.3.

¹⁸ Rosemary Radford Ruether, *Goddesses And the Divine Feminine*, p.8.

¹⁹ スターホーク『聖魔女術』p.172

²⁰ Starhawk, 'Religion From Nature, Not Archaeology,' 2001, January 5.
(<http://www.starhawk.org/pagan/religion-from-nature.html>)

²¹ Asphodel Long, op.cit.

²² Rosemary Radford Ruether, *Goddesses And the Divine Feminine*, pp.296-297.

²³ Ruether, Ibid., pp.306-307.

²⁴ Ruether, Ibid., pp.296-297.

²⁵ Rosemary Radford Ruether, *New Woman New Earth*, The Seabury Press, 1975, p.204.